

都市・環境常任委員会

(令和4年7月25日)

○ 太田紀子委員長

ただいまから都市・環境常任委員会を開催いたします。

当委員会におきましては、インターネット中継を行っておりますので、マイクに近いでの発言、ご協力お願いいたします。

本日の事項についてですが、休会中の所管事務調査といたしまして、四日市市水道事業経営戦略を取り扱ってまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、上下水道事業管理者よりご挨拶お願いいたします。

○ 山本上下水道事業管理者

上下水道局、山本でございます。

今日はよろしくお願いいたします。委員長からお話がありましたように、私どもの四日市市水道事業経営戦略の前期ローリングについて成案とすべく、今、作業を進めさせていただいておりますが、一定のレベルに達したと思っておりますので、一度ご説明させていただきたいというふうに思っております。

令和元年度、私が事業管理者になってからつくらせていただいた経営戦略でございますが、水道料金のほうから先に言わせていただくと、令和7年頃に内部留保資金が枯渇することから料金改定をというようなところまで書き込んだ計画になっておりましたが、鋭意作業を進めていく中で、少し状況が変わってまいりました。令和10年ぐらまでは一応、料金に関しては、改定をしなくても済みそうな形になっております。

これにはいろいろ伏線があるわけですが、計画していたような事業更新、要するに管路の入替え等が、ちょっと思うように進まなかった。もちろんこれは老朽管対策としての、水道管の古いものから順番に片づけていくというような形でしておりましたが、掘り上げました水道管を詳細に調べたところ、思っておる以上に摩耗が進んでいない、もっと長く使うことができるというようなデータ取りも進んできました。

もちろんもう一つに、職員が思うように増えないこと、そして業界も、せんだっての中部地区の総会があった中で分かってきたんですが、日本中の水道管業者さんが大幅に減少しているという背景があります。もちろん私どもの職員も増やしていきたいと思っておりますし、水道を取り扱っていただける業者さんも増やしていきたいというふうに思ってお

ります。

その点で、今させていただいておる、昨年度から実施しました設計施工一括方式は、設計から業者さんのほうとタッグマッチを組みながらやっていくというところを試行させていただいております。比較的いい傾向が出てきておりますし、工期もかなり短くできるというところが出てきております。また、これをやりかけたことによって、請負者側もかなりやる気を出してくれています。やはり、少し変わったことに対してチャレンジしようとしてくれる四日市の業者さんがおりますので、この業界がもうちょっと強く、大きくなるよう、この試行を進めていく中で業者さんを育てつつ、そして、それを監督する職員のほうも増やしていけたらなというふうに感じております。

詳しくは、課長のほうから詳しくご説明をさせていただきますので、ひとつ今日はよろしく願いいたします。

○ 太田紀子委員長

ありがとうございます。

それでは、四日市市水道事業経営戦略について、説明をよろしく願いいたします。

○ 伊崎経営企画課長

経営企画課の伊崎でございます。よろしく願いいたします。

まず、資料の場所について申し上げます。タブレットのmoreNOTEをご覧くださいと思います。moreNOTEのホーム画面の左上に今日の会議というところがございますが、今日の日付7月25日のところに、都市・環境常任委員会から入っていただきまして、会議資料一覧のところの01、上下水道局（資料）というのをご覧くださいと思います。よろしいでしょうか。

それでは、説明に入らせていただきます。

2ページをご覧くださいと思います。

水道事業経営戦略の前期ローリングについてと題しまして、今年度予定しております水道事業の経営戦略のローリングに向けて、出てきた課題の整理、また、ローリングに向けた対応を取りまとめてまいりましたので、ご説明申し上げます。

経営戦略についてですが、これは令和元年に策定いたしました水道ビジョン2019を実現するための中長期の経営の基本計画でございます。計画期間は10年間、前・中・後期の三

つに分けております。令和4年は前期、これは令和元年から3年ですが、これの評価とローリングを予定しておるといところでございます。

まず、事業の進捗とその中で出てきた課題について説明を申し上げます。

経営戦略と表裏の関係にあります投資計画（第3期水道施設整備計画）の進捗状況でございます。基幹管路の耐震化、つまり、管路と水管橋の耐震化と経年管路の更新、管路の老朽化に対する更新、この二つで遅れを生じておるところでございます。

事業の遅れにつきましては、表に示してございます。

まず、耐震化につきましては、令和5年度までの目標8.7kmに対しまして、年度ごとに目標を立てております。3年間の実績といたしましては、ご覧いただいておりますとおり、3か年の目標として4.9kmに対して、3.6kmの実績となっております。経年管の更新につきましては、10年間で154kmが目標でございましたが、3か年の目標の31kmに対して、20.2kmの実績となっております。

また、このほかの課題といたしまして、バスタ事業に伴いまして、中心市街地において管網の整備にも取り組んでおるところでございますが、その中で、不要な管でありますとか、口径が過大となっている管が多くあることも判明しておるところでございます。

次に、収支計画では、当初は、管路の老朽化対策のために投資が増大することから、内部留保資金が10億円を割り込む見込みでございました。それを受けまして、令和7年度頃に15%程度の水道料金の値上げを見込んでおりましたが、さきに申し上げましたとおり、投資も遅れておりますことから、当初の見込みより財源が確保されておるとい状況でございます。また、企業債の残高につきましても、料金見直しの指標として、企業債の残高と給水収益との比率を指標としておりますが、この比率も3倍以下を維持できておるとい状況でございます。

また、一方で、この3年間の事業を進めてきた中で明らかになってきたこと、判明したことがございますので、それらも踏まえまして計画の見直しを図ってまいりたいと考えております。

3ページをご覧いただきたいと思います。

まず、見直しの方向性といたしまして、まず第3期水道施設整備計画ですが、経年管の更新事業につきましては、事業量の見直し、圧縮を図ってまいります。令和3年度からAI技術を活用した管路の劣化度合いを測る劣化診断を実施しております。その結果、塩ビ管は劣化が早く漏水のリスクが高い、一方、ダクタイル鋳鉄管は当初の想定よりも漏水発

生のリスクが低いとの結果を得られております。特にダクティル鑄鉄管の劣化は非常に遅いとの結果が得られていることから、ダクティル鑄鉄管の更新基準年数を改めてまいります。

グラフをご覧いただきたいと思います。図で説明を申し上げます。

上のグラフは、更新の基準を超える、つまり耐用年数を超える水道管の管種別の延長を示した図でございます。第3期水道施設整備計画期間のこの10年間は、ピンク色で示しております耐用年数を超えている普通の鑄鉄管と黄緑色で示してございます塩ビ管、これと水色のダクティル鑄鉄管を更新する予定でございました。しかしながら、水色のダクティル鑄鉄管の更新を20年から40年後ろ倒しができることが判明いたしましたので、第3期の整備計画期間中は、基準を超えた鑄鉄管、ピンク色の部分と、塩ビ管、黄緑色の更新を進めてまいりたいと考えております。これによりまして、10年間の目標でございました154kmは、この基準を見直すことで、事業量としては79kmに圧縮してまいります。

また、更新のペースも見直しまして、令和10年度までは年間10km更新するものとしたしまして、その上で人員の確保や官民連携などの推進により、令和11年度からは更新のペースを上げまして、管路の更新ペースを1年間で14.2kmといたします。この14.2kmは水道の管路の延長1421kmの1%に当たるものでございます。

4ページをご覧いただきたいと思います。

また、配水ブロックの構築に向けた管網整備につきましても、配水管網整備事業におきまして、管路更新に合わせて余剰管路の廃止やダウンサイジングを行ってまいります。

また、基幹管路耐震化につきましても、計画ルートを変更したことによりまして、整備延長を13kmに見直しまして、完了年度を令和5年度から令和10年度に変更いたします。

次に、水道橋の耐震化と更新についてですが、前期に水道橋の劣化診断や耐震診断を進めておりまして、それに基づいて優先順位を設定し、耐震化及び更新を進めてまいります。同時に、管網の見直しも行い、水管橋の廃止やダウンサイジングによるコスト縮減や期間の短縮も同時に進めてまいります。

員弁系導水管につきましても、協議を継続してまいる予定です。以上のことから、当初計画しておりました15橋から9橋に見直しまいります。また、近年、河川管理者である三重県との河川協議に従来より長い時間を要していることから、令和13年度完了を目標に取り組んでまいります。

高度浄水処理施設整備事業につきましては、令和元年度に神田取水場にてクリプトスポ

リジウムなどの指標菌が検出されました。そこで、安心、安全な水道水の供給を行うため、令和9年度の供用開始に向けて、小牧水源地に紫外線処理施設の整備を第3期施設整備計画に位置づけまして、新たに整備を行ってまいります。事業規模といたしましては、総事業費29億円の事業規模を見込んでおります。

また、前期に取り組みましたバスタ事業に伴う中心市街地の管網整備におきまして、余剰な管網の整備を行ったところですが、廃止できる延長が4.2kmあることが判明しております。これによりまして、更新費用の削減が可能になり、16.9億円の削減効果を見込んでおるところでございます。こうした取組を全市的に進めるため、配水ブロックの構築に取り組んでまいります。

次に、その他の取組といたしまして、官民連携をより一層進めてまいります。現在も、設計施工一体発注の試行を進めておるところではございますが、今後、管路の維持管理業務においても、ベテラン職員の退職により職員の経験不足が予想されております。また、工事業者、施工者においても人員不足が懸念されておるところでございます。そこで、管路の更新に維持管理業務も加えた形で、官民連携の手法について検討を進めてまいります。

また、人材確保と技術継承として、令和7年度の下水道事業概成後の職員配置転換につきましても、検討を進めてまいります。また、水道特有の技術継承についても、研修の実施及びナレッジマネジメントも試行してまいりたいと考えております。

5ページをご覧ください。

収支計画の見直しにつきましては、先ほども申し上げましたが、内部留保資金の10億円、企業債残高、給水収益の比率は3倍以下となりますことから、当面、現行の料金体系を維持できると考えております。こういった対応を取りながら、経営戦略の前期のローリングを進めてまいりたいと考えております。最終的なローリングの結果につきましては、また説明の機会をいただきたいと思いますというふうに考えておるところでございます。

なお、参考といたしまして、ダクタイル鋳鉄管の更新年数の基準を参考資料として記載しております。またご覧いただきたいと思います。

資料の説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

○ 太田紀子委員長

ありがとうございます。

説明はお聞き及びのとおりでございます。

これより質疑に入ります。

ご質疑のある委員の方は、挙手にて発言をお願いいたします。

○ 荒木美幸委員

まず、管路の更新には本当に莫大な費用がかかりますので、しかし、インフラをしっかりと守っていくためには大事な事業であると思っておりますが、今ご説明いただいた当局の様々な工夫等によって、令和7年の水道料金を何とか食い止めることができたということは、非常に頑張っていたんだなということをもまず評価させていただきたいと思っております。

様々な課題がある中で、やはり一番大きな課題が技術者不足という、これは上下水道局の職員もそうですし、先ほどご説明があったように水道事業者も少なくなっているというところで、非常に大変な時代に入ってきたんだなということを感じます。

そういう中で、人材確保については、先ほども伊崎課長からご説明いただいたように、様々な取組もしていただいているわけですが、今年度でしたか、来年度の採用に向けて、たしか6月ぐらいでしたか、少し試験を早めていただいたという状況で、もう職員の方が決めたかどうか、私ははっきり分かりませんが、少し前倒しをして採用試験を行ったということについて、何か成果があったのか、よい人材を確保できる機会と、今後も含めてですが、確保できる見通しが立っているのか、その辺の状況についてちょっと教えてください。

○ 駒田上下水道局管理部長

先ほど荒木委員からのご紹介にあったように、今年度から採用試験のほうを前期という形で前倒しにして、現在も7月下旬号の広報にまた募集が出ていますが—これが従来の今までやっておった統一試験と言われるものなんです—が—人事のほうに2段方式に採用の予定を変えていただきまして、まず、5月中旬あたりに1回出させていただいて、今、まだ決定はしていないんですが、7月下旬に2次試験を行うというところで、一応、募集した人員が集まっているということは聞いておりまして、また後期のほうでも今、募集をしておるという状況でございます。

○ 荒木美幸委員

引き続き効果があるようであれば、来年度も同じように、前倒しをした人材確保、上下水道局がしっかりと進めていただければと思います。

ご説明いただいた資料の中にもありましたけれども、いわゆる業者さんのほうも人材が不足をしているということで、今後は、水道の維持管理についてもお願いをしていくということによって、つまり、そういった方々に仕事の間を与えるということの効果と、それから、仕事を維持管理のところまでお願いすることによって、いわゆる人材育成も含めたという効果を見てのことという理解でよろしいでしょうかね。

○ 川島水道建設課長

水道建設課の川島です。

業者側の人材確保・育成というようなところのご質問かと思います。まだすぐということではないんですけど、長期的な展望の中で、先ほど伊崎課長のほうから説明させていただいた、ここ数年の目先の事業をどうこなすかというところで、設計施工一括方式を団地の一部分で今、ちょっと試行をさせてもらっています。それを何件かトライして行って、その先には、例えばもう少し大規模であったり、あるいは地区単位であったりというようなところを、今後の事業年次計画で、令和10年以降14kmという説明をする中で、やはりある程度大規模に進めないと、今までのような単純に古い管から年次的にやっておる線とか点に近いような施工方法ではなかなか、この距離を1年間で更新するというのは非常に難しくなります。そういう意味で、面的な、エリア的というような更新に取り組みたいというのが、私どもの今の考え方です。

そのためには、受注者側である業者の数を増やすということ。それから、場合によっては増えないかもしれないけれども、そこに携わる人員を、受注者側の施工者の人の確保、それから、今まで水道の経験がない人たち—我々と一緒ですけれども—その質の確保という意味で経験を積んでいただく。そういうところも含めて、業者側の人材育成に取り組むために、ある程度規模の確保をしてあげないと、経営する側としても人材を採用というところにはなかなかいかず、一、二年のロットぐらいではやっぱり長期の人材確保というのは難しいと思うので、ある程度10年とか20年とかという事業確保をしてあげないと、請ける側の経営者もやっぱり難しいと思う。だからそこら辺を今、我々も勉強をしているところで、どういう発注方式、あるいは育成方式がいいのかというのを、これからまだ継続中なんですけれども、日本全体のいろんなところ、あるいは場合によっては世界の状況

も踏まえて勉強して、それこそ本当の意味の官民連携、あるいは組織体制も含めて検討を進めておる状況です。

今後については、もう少し勉強が進んだ段階で、また議員の皆さんともいろいろディスカッションをさせていただきたいなと思っておるところでございます。

○ 荒木美幸委員

ありがとうございます。

すごく深く考えていただいているんだと今、改めて認識をさせていただきました。やはりそういった水道業者さんがいてこそ、上下水道局の事業が本当に進んでいくと思いますし、そういうふうに関係をすることによって、相乗効果として上下水道局の技術もアップし、また業者の技術もアップするというので、すごく素晴らしいことだと思いますので、しっかりと進めていただければと思います。ありがとうございます。

逆に、先ほどの採用の話もありましたけど、例えば市の職員を採用していただいていると思うんですが、そういった若い職員の技術者の方が途中で、あまり合わないからと辞めていったりとか、そういう傾向というのは、上下水道局はどんな感じなんですか。

○ 駒田上下水道局管理部長

荒木委員言われるように、そのような傾向というのは、どうしても私ども四日市市上下水道局だけじゃなくて、市全体としてだけではなくて、全国的にもやはり技術者不足というところで、若い職員さん、私どもは市内から来ている職員さんはあまりないんですけど、市外から来てみえる職員さんは、ご家庭の事情とか、そういうのでやっぱり地元の自治体に戻られるという方も、中にはちょっと増えておるという状況は把握しております。

○ 荒木美幸委員

少なくとも市内にお住まいの方については、今のお話だと引き続き勤めていただいているという状況だということですね。

○ 駒田上下水道局管理部長

そうですね。市内の方については、あまりほかの自治体へ行かれるということは少ないですね。

○ 荒木美幸委員

技術者ですから、市役所のたくさんのお仕事があって、多くの職員の方がいろんな部署に行かれてキャリアを積んでいくという、そういうお仕事なのかなと思う中で、どうしても上下水道局の技術のお仕事というのは、できる範囲というのが、いきなり健康福祉部に行ったりとかこども未来部に行ったりとかはなかなか難しいと思いますので、私はぜひいろんな研修はしていただいていると思いますけれども、技術者として、市の職員としてやっていく中で、技術アップだけではなくて、やはり人生と仕事をどのようにプランニングしていくかという、キャリアプランというか、そういったところの教育であったりとか研修などもともにしていただいて、上下水道局の職員として働くことの誇りであったりとか意味であったりとか、そういうことが醸成できるような、そういったフォローアップをお願いしたいなというふうに思います。引き続きよろしくお願いします。

以上です。

○ 竹野兼主委員

今、荒木委員が言われた、職員が辞められていくことでは、いろんな事情があるというふうに上下水道局としては把握をしている。じゃ、その対策というのは、ちゃんと考えられているのかなというふうに思うんです。

特に若手であれば、今言われる、非常に技術的に難しいものを、例えば経験のない人があそこのところで案件を任せれば、当然、負担となってというような話も聞こえたりもしますので、その辺のところをちゃんとやらんと、今言っておる、ただでさえ不足の部分のところ、やっぱり段階を踏んで、基礎的なところからしっかりと積み上げられるような形が必要ではないかなというのを思うんですけど、その点については今、分かっていますけれども、どういう対策みたいな、今後、どんな形を考えているのかというのをちゃんと答弁しておいてもらう方がいいのかなと思うので。

○ 川島水道建設課長

水道建設課、川島です。

水道維持課の生川課長のところも同じようなところなんですけれども、まず、今現在は技術部門のところ、どちらかというとバディー制というか、技術の経験の浅い子、それと

ベテランをできるだけコンビを組んだり、トリプルで組んだりとかいろいろありますけれども、現場へ一緒に行って、また、戻ってから、ここはこうしたほうがよいとアドバイザー的についたりとか、それから、例えば水道維持課のほうですと、直営職員で修繕に行ったり、監督じゃなくて実動するほうもあります。そういうところなんか特にそうなんですけど、実際に現場でどう作業する、手順であったりとか、危険なポイントであったりとか、気をつけるポイントであったりというところ、グループというかバディー制、ほぼほぼ2人か3人がワンセットで動くような感じ、ベテランと新規採用職員。それもふだんから、例えば雨の日なんかの現場へ行かない場合には、資材倉庫であったり、うちの駐車場ですら実習のような形で実際やったりもして、なおかつ現場へ行ってバディーで動くというようなことは実務的にやっております。

それと、冒頭、伊崎課長から説明させていただいた、資料にちょっと書き込ませていただいたナレッジマネジメント、要は知識であったり技術であったり技能という、今、持っておるものが、それぞれの職員が今現在どのレベルにあるか項目出しをして、例えば設計の能力が今はこの程度、1割ぐらいたとか3割ぐらいたとかいろいろ、設計も、具体的な計画にはできるけれども図面に起こすのが苦手だとか、あるいは積算が苦手だとか、項目出しをして、それぞれの個人の今現在の能力がどのレベルにあるのか、今年からこういう判断の取組を始めさせていただきました。

これを何度か繰り返して、例えば4月時点はこうだと、これは9月にはどうなったかとかいうような管理をさせていただいて、その個票が人によって当然違いますので、得意不得意というのが出てきます。そこで、得意を伸ばす、あるいは不得意をサポートすると、そういうところの見える化ですね。そういうことをやって、それを積み上げて人材育成に活用しようと、今年、取り組み始めたところでございます。

以上です。

○ 竹野兼主委員

取組方というのは、なるほどなと思うこともしっかりあるので、ぜひしっかり進めていく。でも、職員が辞めていくというのは、結局、最終的には責任はトップのほうにかかってくるというところを認識してもらって、しっかりとした形を整えていってほしいなど、それだけ意見として申しておきたいと思います。

それ以外のところで、いいですか。

資料の中で説明いただいた、更新を行わなくてよくなって16.9億円のプラスが出るという話ですけど、耐震化で、要するに必要なはないから廃止するよという部分と、その事業の実態というか、例えば取り出すのとかという意味なのか、ちょっとその辺のところは技術的なことが分からんもんで、廃止というのはどういうような状態のことを指すのかなと。それは今後、何かのときに問題になることはないのかというのだけ、ちょっと教えていただきたいと思います。

○ 川島水道建設課長

水道建設課、川島です。

管路の見直し、更新に当たってどういうことをするかというところから、まずお話をさせていただきます。

基本的には、今入っておる管が全部使えるというか、そのルートを全部使うという前提で試算は確保しております。ただし、今現在の水道管の入っておる管網、それから管の能力、これにつきましては、高度経済成長期、人口がどんどん増えておって、まちが肥大化しておる時代に造っておりますので、ざっくりいうと2倍の能力があります。今現在、日10万か11万tぐらいの水量が送ればいいんですけども、実際は20万tぐらい送れるぐらいの能力があります。ということは、ざっくりいうと管の大きさが半分でもいい、あるいは管のそれぞれのルートもざっくりと半分の能力でいいと。あるいは、あるエリアに送るのに大量に水を使うので、2本、3本というルートから送っておったものが、1本は要らないよねということが出てきます。

そこら辺をこの資料にもありましたけど、AI技術というのが大分進んできまして、シミュレーションをかけるわけです。実際にこの管路を止めたならそれで賄えるのか、どっちの管を止めたほうがいいのか、あるいはどの管をサイズダウンしたほうがいいのか、そのサイズダウンもどの程度までサイズダウンしたほうがいいのか。この辺りが、昨今のコンピュータ技術が格段に進歩してきたもので、この辺が少しずつというか、大分分かりやすくなってきたというのが正直なところなんです。

それで、更新に当たっては、今までは単純に古いものから、極端なことをいうと必要のない管も入れ替えておる可能性はあるんですよ。そうやけど、今後はもっとそれを利用して効率よく入れ替える。入れ替えるにしても、サイズダウンできるものほとんどんサイズダウン、不要なものは廃止する。

その最たるものが、今、このバスタ関連で、駅前関連を鋭意入替えをやっておるわけなんですけど、そこの中でシミュレーションをかけたら、中央通り70m道路に入っておる600mmの管は取りあえず不要だろうという結果が出ました。というところで、障害になる管は入れ替えるものが必要なんですけれども、そもそもの600mmの管は止めてもいいと。これで、ざっくり16億とか19億とかというオーダーでコスト削減ができる。

さっき竹野委員が言われた例えば水道管については、実際にどうやって入れ替えるかというところなんですけれども、理想は、同じ管路に入れ替えるのが理想なんですけれども、地下の中には下水道管もあり、ケーブルもあり、幾多の地下埋設物がおるものですから、入れる余剰があるところには同じルートに入れるんですけれども、どうしても入らないところも出てきますので、そういうところについてはルートをいろいろ検討して、迂回ルートを取らざるを得ない。この辺が、更新で約4 kmぐらい増えたというのが、ルートを回してこないと入れるところがないものですから、そういうルートは出てくるというような形。

入替えができるものについては、撤去できるものは撤去するんですけれども、実際には水道の上に下水がおったりケーブルがおったりするものですから、廃止は、止めるんですけれども、そこの中はモルタルを注入して埋め殺すような形で、空洞にしておくと何かの際に雨や土が入って行って陥没なんかが起こりますので、そういうところにはモルタルを入れて、管は閉塞するというような形で施工するというところが現状でございます。

○ 竹野兼主委員

廃止というのはどんな形なのかなと思っていたので、ちょっと確認をさせてもらったんですけど。

そうすると、それを止めることを、モルタルを入れるという話もあったけど、その部分の費用については、それほど大きな金額ではないと。それを止めるのに水の流れるもの、必要な量というのは確保できるから大丈夫だと。ただ、今言われる、それをどけるというか、回すところの管がないから4 km分、それは説明の中にあつた、年数が数年遅れるよという状況やということで理解して、それでよいんですよ。

○ 川島水道建設課長

はい。

○ 竹野兼主委員

分かりました。

あともう一つ、10年間で、内部留保資金が10億を切らないからという話をされましたよね。それは事業がないから、事業を進めることができないから、事業の費用がかからずに、10億円を切らないというふうに聞こえたんですけど、そうじゃないの。

というのが、10億円は、使う用がどうしてもなかったから、令和10年の時点で10億円を下回らないけど、将来的に事業が進んでいけば、最終的に内部留保資金が下がってきますよね。そうしたら、その部分の確保というのが見えてこないと、水道の安定的な運営って大丈夫なのかなって、今は令和10年までは大丈夫ですよって、先はどうするのやというふうにどうしても感じたもので、この辺のところについての所見をお願いしたいと思います。

○ 伊崎経営企画課長

内部留保資金のことについての先行きのご質問やと思います。

まず、内部留保資金ですけれども、毎年毎年のこの場合ですと、水道事業の運営によって、使用料収入を中心として収入を得ているわけですが、その収入のうちの減価償却に充てられていく、当然、実際の維持管理をしていく部分については、頂いた使用料のお金が外へ出ていくわけですが、減価償却費に充当されている部分につきましては、減価償却費というのは概念の費用ですもので、施設が1年間古くなって価値がそれだけ減少していく、その分を費用と見立てて、その分も当然、1年間施設が古くなったものであるから、つまり物の価値が下がっている部分についても費用として認識をして使用料を頂くという形になっております。

概念と申し上げましたのは、減価償却費はそういった考え方の費用ですもので、実際、お金が外へ出ていくわけではないわけです。実際、維持管理をする費用として出ていくのではなくて、減価償却費としての概念に充当された費用、収入として勘定しますので、この場合、ちょっと専門的になりますけど非現金支出といいますけれども、実際にお金が出ていくわけじゃないけれども費用として認識しているお金だというふうになります。非現金支出である減価償却費に充てられた使用料は、これが内部留保されていくという形なんですけど、それをどんどん蓄積して行って、実際の費用の更新のときに、余ったお金を使って新しい施設を買うというのは、大きな全体の仕組みということですね。

ですので、今ある内部留保資金は、過去の利用者の方が、施設の老朽化のための費用と

して支払った使用料を水道事業の中にプールしてあって、水道施設の更新の際にプールしてあるお金を使って更新を図っていくというようなのが、内部留保資金の使い方という形になります。ですので、当然、今あるお金が限度じゃなくて、毎年、内部留保のための使用料は頂いておりますので、今後、10年、20年、30年たっても、減価償却見合いの使用料というのは頂き続けていきます。

ただ、更新のペースが一定であれば、内部留保資金も一定の額の変化になっていくわけなんですけれども、先ほども少し触れている部分もありましたが、四日市市の水道事業が、やはり人口が増えていったときに設備投資をどんとしている事業であるということから、更新についてもその波が重なりがちだということが一つ、問題としてはあると。

その中で、今ある内部留保資金、当然、将来も積み上げていくんですけれども、その内部留保資金の中でうまくマネージできるか、更新がうまくできるかどうかということが課題だというふうに思うんですけれども、その中で、当初の見込みの中では少し、令和7年頃に内部留保資金の10億円という指標はあるんですけど、その指標を下回ってしまうのではないかなというような予測が立っておりました。ただ、先ほど申し上げました、事業の遅れというのは最初に現状として申し上げましたけれども、今後の事業展開の中で、更新の距離全体を圧縮することができた、そういうことによって、事業費がそれだけ要らなくなっていくよということも可能になりますもので、ただ、逆に、逆の要素として、今度小牧に造る予定の紫外線の施設なんかは、当初想定していなかった施設ですので、その部分についての資金需要が新たに生まれたとか、そういったプラスの要素、マイナスの要素というのを組み合わせて考えていくと、この10年の計画期間中は内部留保資金の10億円というのは、何とか決算の審査を得ての話になってくるかと思えますけれども、今現在の見通しとしては、10億円は何とか維持できるだろうという見込みです。

一番最初にご質問いただいた、その先どうなのかというようなご質問ですけれども、それは今の段階では、この20年大丈夫ですとか、令和十何年にどうこうという話はちょっと申し上げにくいところなんですけれども、当然、計画期間の前期のローリングが令和4年度ですもので、次のローリングが令和7年で、大きな計画は令和10年に、10年単位で変えていきますので、その都度でこういった収支の見通しというのをお示ししながら、また、決算を通じても説明をさせていただきながら、将来の見通しというのを説明させていただきたいと思っておるところでございます。

○ 竹野兼主委員

ありがとうございました。基本的に内部留保資金の基本がこれぐらいの金額なんだという、今言われた10億という部分を前後して、どういう方法でしっかりとした運用をしていくのかは、十分理解できたつもりです。

今回、この状況で話を聞くと、内部留保資金も大丈夫、それから値段も上げなくても大丈夫のような気がするのと、市民には安心されるかもしれんけど、水道については安全、安心がまず一番であって、費用面の部分は、値上げせざるを得やんときには、今、これから工事をしようとする、今の見積もりから大きく変化する可能性ってありますよね。今の戦争なり、様々な外的要因のところについては、しっかりと情報収集しながら、その辺の予算の流れをしっかりと行ってもらいたいなというふうな要望をさせていただきたいと思います。

以上です。

○ 笹井絹予委員

ダクタイトイル鑄鉄管というものは、どっちかというとは基幹系で使っているものという理解でいいのか、それから、塩ビ管というのは短いというか、宅地系とか身近なところで使っているという、そういう理解でよろしいのでしょうか。

○ 川島水道建設課長

水道建設課、川島です。

ダクタイトイルというのは管路に使う割に新しい素材なんです。ダクタイトイル鑄鉄管というのは鉄管、マグネシウムなんかの合金状態になっておって、柔軟性というか強度が上がっておる管なんです。今現在、四日市市では、ダクタイトイル鑄鉄管はどのようなものに使っておるかという、75mm以上、小さな管から大きな管まで、かなりダクタイトイル鑄鉄管というものを使っております。

塩ビ管については、これは今というよりは昭和の終わり頃に使っておったものなんですけれども、これはどちらかというとは口径の小さな150mmとか100mmとか、どっちかという、今、笹井委員が言われたような、身近なところで使っておったんです。当時は、軽くて扱いやすくてということで普及したんですけれども、先ほど冒頭で伊崎課長から説明したように、掘り返してみたり、あるいはそれから、今、四日市で漏水が起こっておる現場を確

認したら、塩ビ管の本管で割れておったりというような、現実的には四日市の漏水事故、それから、老朽化が進んでおるのは塩ビ管のほうが多いというところなものですから、今後の更新はどちらかというと、年数も当然考慮するんですけども、管の材質にこだわって、さっき私も言いましたように、AI技術を使うとやっぱり、この管材のこの年代のほうを早く交換したほうがリスクが低いですよ、あるいは投資効果が高いですよというのが見えてきたものですから、ダクタイル鋳鉄管のような強度の高い、あるいは長く使えるようなものよりは、塩ビ管のものを先に交換していったほうが効率的だということで、見直しをかけたというようなところでございます。

○ 笹井絹予委員

そうすると、塩ビ管というのは、どちらかというと昔のものと言っていたんですけど、それを更新するのにまた同じような塩ビ管を使って、昔に使っていたものをもう一度使ってやるのか、それか新しく出てきている、それに代わるようなものを使っていくんですか。どっちなのでしょう。

○ 川島水道建設課長

もう今現在は、塩ビ管を使うということではなくて、さっきの——口径にもよるんですけども——ダクタイル鋳鉄管というものを使ったり、最近では、口径の小さいものはハイポリエチレン管という、強度の高いポリエチレン管というものが出てきておまして、それを今現在は50mmについては、ハイポリエチレン管というものを使っております。75mm以上400mmぐらいまでの間は、ダクタイル鋳鉄管のGX管という耐震性も兼ね備えたようなもの、管の材質を変えて、より長寿命化に貢献できるような管材というものを採用しております。

○ 笹井絹予委員

ありがとうございました。分かりました。

○ 伊藤昌志委員

ありがとうございます。

ご説明いただいたように、全国が今、老朽化して人材不足に直面しておると思うんです

けれども、これに人口減少で、四日市は多分、同じ人口を保つてというので目指していくのかなというふうに思うんですが、法律が4年前に変わりました、その中で大きな二つ気になることとしては、広域連携がよりできるようになるよと、もう一つは、官民連携が運営権まで民営化できるというように変わりましたが、現状、もうこの先やと思うんですけど、法改正について、山本事業管理者が何か思うところがあれば教えてください。

○ 山本上下水道局事業管理者

私が上下水道事業管理者になってからずっと言わせていただいておりますが、官民連携もいろんな方法は禁じ手なしで考えるというスタンスでやらせていただいております。ただ、思いとしては、自分のところの施設はやはり自分のところできちっとすべき、業者さんを含めた、使えるものは使うけれども、内部統制をしつつ外部統制もする、自分のところの施設は自分でちゃんと見れる技量を持ち続けるというところが肝やと思っています。

この4月1日から宮城県は、工業用水を含めてみやぎ方式と呼ばれる、20年間全部任すという手法を取られましたけれども、確かに東北のほうの、要するに官側の技量が下がっておられる現状下においては、やむを得なかったのかなとは思っております。ですから、動きをかなり注視させていただいております。

そういうような状況でありますけれども、基本としては、いろんな力は使うけど、きちっと統制力を持った上下水道局であり続けたい、そうすべきだというふうに、上水道も下水道のほうも思っております。だから、その方向で進めさせていただいております。

○ 伊藤昌志委員

ありがとうございます。

なぜか改正してから、全国の中で狙われている20自治体みたいな中に入っているという話をよく聞いて、水道のことを調べ出してからよく言われるんです。ですので、今の力強いお言葉、ありがとうございました。

以上です。

○ 川村幸康委員

人手不足と言ってもいろいろあると思うんですけど、具体的には何なんやろうかと。例えば人がおらんでどういう損失になっておるの。人手不足というのは、言葉では分かってお

るんやけど、なかなか腑に落ちやんというか。一般論で人手不足というたら、そうなのという程度の話やけど、水道事業で人手不足で何がどう困るのか。ここに書いてあるけど、人手不足は書いてあるけど、それがどういうふうに現場へつながるのかな。

○ 駒田上下水道局管理部長

具体的に人手不足というのは、私どもの土木技師が不足しておるといところなんです、土木技師の業務としてはやっぱり工事の設計、監督をするといところがございます。当然、1人の職員に対してできる工事数は決まっておりますので、どうしてもやっぱり職員の頭数がないと工事の本数をこなしていけないといところが、行政の技術職の人材不足、それで当然、水道の更新工事もなかなか発注できないといところがあると認識しています。

○ 川村幸康委員

だから、それが、経営戦略の中でどう赤字にといか、損失になるのかがあんまり。例えば、私の事業に例えてしまうもんであかんのやけど、自分はそうやって考えてしまうもんであれなんやけど、俺のところでは肉を切る人がおらんだら、例えば100kgの肉を切らなあかんのに、寝やんと切っても10kgしか人間が切れやんやったら、100kg売れていくのに対してあと9人雇わなあかんとい話の世界やろうと思ふんやわ。それが、9人雇わんとよそへ90kg買いに行かれるでといのが損失やわな。

上下水道局の場合やと一者独占で、今、10kmの水道管しかやれやんのやったら10kmでも別にあと何年かかってでも10kmやっけいきゃええんやし、不要不急といったら工事も支障が来るのかっていったら来やんのかなって私は考えてしまうところがあるもんで、水道事業の計画と言っておるけど、さっき言っておったように、通さんでええところまで無駄をしておったといのは省いてほしいけれども、あとは一者独占やで、華美にならんとやっけいくといだけでいくと、ここ最近はこれでもう水道料金上げやんでええといけど、普通、民間事業者で競争相手がおるんやったら、給料を下げようかとい話になってくるでさ。だから、企業経営として考えると、一番大きいのが人件費なんやで、そのところにもメスを入れやなあかんようになるのか。だから、そこらをもうちよっとガラス張りにせなあかんのかなとい気はする。

何せ腐るものでもないしさ。大水は事やで、一般論でも。だけど、今、もうばつとこれ

だけ普及して、捻れば出るところがあって、それから何年かでやっていかなあかんという
と、どこを一番やらなあかんねやという話でいくと、もうある程度、装置産業として装置
はされたで、俺はシンプルにそうやって思うで、あんたらでも思うておると思うんやけど。
だから、事業経営戦略やったら、やっぱりそこをきちっと私らに分かりやすく、市民に説
明して、これだけの給料をもらっても水道事業はちゃんとやっているんですよというのに
ならんとあかんって、何かずっと話を聞いておって、一番腹落ちせなあかんところを話
をしていないなと思って。

経営戦略は、誰がつくったのかなと思うんや。俺は内部だけでつくと、やっぱりこん
なものかなとも思ってしまった。やっぱり外の人きちっと見て経営戦略を立てると、俺
がもし外部に入っておったら、あんたら自分ら同士で解釈し合っておるだけの話で、市民
から見たら、値段が上がるか下がるかも大事やけど、この先もどうなるのかというところ
の目鼻が見えてくると、経営戦略やなという気はするで、そこをちゃんと分かるようにす
るのが経営戦略やなと思うんやけど。

以上です。

○ 山本上下水道局事業管理者

ありがとうございます。やはり言い得て妙やなと思います。どういうふうに見るかとい
うところだと思います。

もちろん経営戦略のつくり込み自身が、やはり一定のフォーマットでやっておりますの
で、どうしてもそういうふうに見れてしまうのかなというところは思いました。その中で、
去年ぐらいから見直し作業を考えている中で、どうしたものかというところは感じており
ました。契約方法の改善やら、工事のやり方、いわゆる私が得意とする部分については、
かなり手を入れさせていただいたと思います。

正直言って、苦手な部分、要するに帳面の部分です。この辺のところは正直あまり得意
ではないので、管理部長をはじめ、いろいろ考えてはいただいておりますけれども、
やはり水道事業自身の成り立ちが、川村委員もおっしゃっておられたように装置産業その
ものでありますので、あすなろう鉄道で苦勞した側からすると、こんな装置産業はあんま
り面倒を見たくないなというのが正直なところなんです。投資してあって当たり前使える状
態ですので、それを維持していくというのはなかなか難しいと思います。

もちろん四日市が華々しかった頃に、管網の主体のところは出来上がっております。で

すから今、2倍の余力があるような状態というのは、経営上は非常に不利やと思います。ただ、装置産業ですので、だましまし使えれば、経営としては成り立っていく。装置ですから、動くうちはいい。減価償却していっても水道管としての機能さえ満たせばいいわけですので、その辺のところをどうやって市民の方々に分かりやすく説明していくかというのは、正直なところ難しいな、どうやってするのがいいんだろうかというのを、お言葉を聞きながらちょっと感じました。いかに四日市の水がおいしくて安全な状態であるところというのを説明していくか、これは3回目のモンドセレクション最高金賞をいただいた泗水の里自身のPRと同じことやろうというふうには思います。だから、その辺のところはちょっと考えないといかんのだろうなというのは思っておりますが、今こうですというふうなところがないのも事実です。

人材面についていうと、四日市特有のやはり不利さ加減はあろうかと思えます。実業高校2校ある中で、市役所が採用試験をする頃にはもう人材が限られている。やはり民間企業のほうに行かれてしまって、公務員志望もしくは大学を希望されている方が市役所の採用試験を受けるという四日市市の実業高校の状態を見ると、なかなか人材がそろわないなど。

実は、最近では、やはり県の南のほうの実業高校から来ていただいている職員が増えています。その中には、浜田貯留管を見学してくれて、四日市市はこういうような仕事があるんだというところで、採用まで至ったという実例もありますので、やはり人材については、いかにPRしていくか、そして、民間企業との人材の奪い合いになるのをどういうふうに行行政が立ち向かえばいいのかというのは、ちょっと答えを持ち合わせていません。民間企業さんがもう春のうちに人材確保されてしまいますので、なかなか難しいなど。

だから、インターンシップで来ていただく、2年生あたりには十分にPRして、私どもの採用試験を受けてもらえるような環境を整えていくというふうなところをさせてはいただいていますので、なかなか難しい状態ではあるけれども、それをいかにしていくかというのは、これは我々の努力のしがいのあるところだろうとは思っています。そのようなところで、全庁的に対応していかない限り、難しいかなというふうに思っております。

○ 川村幸康委員

多分、水道事業の経営戦略を立てるんやったら、やっぱり上下水道局以外の人も入れて立てるべきかなとは思う。立てておるの、これ。立ててないやろう、内々だけやろう。だ

から、内部だけじゃなくて、やっぱり経営戦略を立てるときは、外から見てどう思われるかということの視点が抜けておるで、こういう書きぶりになるし。見直しするときだけでもいいから外部の人を入れて、きちっとこういう人ですというて、聞きたくない、言われたくないようなことも聞けるようなことをやると、いい戦略になるのかなと思う。刺激がないと、内々同士の解釈だけでどうにでも張りつくでき、これで正しいですって。それはあまり、企業会計としてはよくないなというのが一つ。だから、やっぱり外部からの意見を聞いて、頭の中の理解を変えていくというのが大事。

あとは、装置産業やで、工業用水でもっと増えるという予測を倍々以上にしたときに、私ら外部の議会側のが言うて、見直しかけろと言うのを無理ですと言うておったのを、言っただけで言いまくって結局、あなた方も動いてくれて理解して、契約料を下げたわけやんか。今度、もうそれ以上、下げれやんというところがあるのやったら、それでももう一遍頑張っしてほしいなと思うのが一つやろうし。

それともう一個あるのが、例えば俺のところていうと、1日に100kg切れる肉の気概があったけど、もう10kgしか切らんやったら、10kgの肉にするのか、それをやっぱり100kg受注しようとするのかによって、全然違うやろうなと思っておるんやわ。そうするとそれだけのサイズにしたんやで、それだけの水を使うようなことを、ここでいうたら都市整備部に働きかけやなあかんやろうけど、もう少し使えるような、投資した分だけを少しでも回収できるようなことをしようかというところに、私は水道事業としての戦略を立てるべきかなと。

四日市市はやっぱり豊かな水なんやで、この間もお願いしたみたいに、ちょっとマンションが建ったら今まで10万ぐらいの湧き水やったのが、1棟で月70万ぐらいは増えたよな、湧き水が。それぐらいの湧き水の多いまちなんやで、水は豊かなんやで、そうすると、やっぱり水をどうやってもっと使ってもらえるかというのをやったほうがええんと違うかなと思うて。

だから、開発せいとかいうと、みんな悪のように思うけど、四日市には水を使ってもらえるような装置あるのやで。それをどうやって売り込んでやるかというのがやっぱり大事。それには、今の都市計画なり、四日市のまちづくりでは少し下手なんやわな。もう抑制やで、市街化ばかりやろうとするけど、市街化調整区域の中で水を使ってもらえれば、それはそれでええんやでさ。

そういう考え方が、水道事業の観点から物を見てもらうと、私は開けてくるのと違うか

など思うんやけどな。そうすると若い人でも、夢のある仕事ができるわな、水道を通じてでも。武器やでさ、水が豊富にあっつてうまいというのは。

もう一個、さっき事業管理者が言うたように、四日市の水はおいしいよというのを、もっともっと宣伝せなあかんと思うわ。全然足らんと思うね。ウォーターサーバーをかうてもらわんでも、四日市の水で十分ですよというのは民業圧迫にはならん思うでさ。もっとおいしい水をアピールするようなことも、水道事業の戦略には要るのと違うのか。

そんなのを見直しの中につけ込んで、私はやるべきかなと思っておる。思っておることやわな。だから、内々だけでやるのと違って、外から水道をどう見ておるのかという人間の考え方を入れるべきやわ。

○ 山本上下水道局事業管理者

外部の目線というところのご指摘、ありがとうございます。確かにおっしゃるとおりやと思うので、どうやってしたら組み込めるのか、四日市市の蛇口からおいしい水が出るということをどうやってPRしていくかというのは、正直、ずっとどないしようと思っておるところでもありましたので、この辺は職員にも言うておるところであります。

PRが下手なのは事実やというふうに思っています。これはもう、四日市そのものが下手やと思います。もう少し上手に、コロナ禍でなかなか他都市の様子をじかに見ることができないのであれですが、都市整備部長の時代に出歩いたところが、やっぱりPRがうまいなというのは、鉄道部門でも四日市あすなろう鉄道の関係で行った都市は、ここはやっぱりうまいなというのはちょっと思った覚えがありますので、四日市のおいしい水、ボトルウォーターよりもはるかに品質管理もしておいしいのにもかかわらず、何か生水を飲むなというようなPRをされるのもちょっと思うところがありますので、これは、教育関係者を含めてPRしていかなあかん点やというふうに思っています。

なかなかやはり、幼い頃に刷り込まれるとずっとその辺が残ってしまいますので、川村委員のおっしゃっていただいたこと、やはりこれは上下水道局として全体で考えつつ、なおかつ外の目線というのが、やはり本庁からちょっと離れておることもあって、その辺の傾向はあろうかと思えます。局に移ったときにそんな感じをしましたので、いつの間にかちょっとそれになじみ過ぎている点がありますので、その辺はちょっと改めていかなあかんというふうに思いました。ありがとうございます。

○ 川村幸康委員

環境部が、何年生かが必ず北部清掃工場に来て、子供が一定の見学をして思うところがあって、リサイクルに興味を持ったりする。やっぱりある程度、脳が軟らかいうちに、きちっと正しい教育をしていくということが大事かなと。

私が小学5年生のときに親父が市議会議員になって、そのとき、初めて親父が産業生活常任委員会か何かの委員会に行ったときに、何げなく話をしてずっと覚えておるのが、おい、幸康、四日市市の水ってうまいのを知っておるかと言うもので、いや、公害で汚いやろうとかそんな話をしよったら、いやいや、横浜港や神戸港へ入ってくる外国船も、必ず空にして、四日市で水だけくんで国に帰るんやぞ、それぐらい外国は水が高いんやで、四日市市で最後は、横浜港や神戸港へ入った船も、わざわざ伊勢湾へ寄って四日市港の水をくんで自分のところの国に帰っていくんやで、よっぽど世界一うまいんやぞ、四日市市の水はと言うておったのを覚えておるのが、俺が小学5年生のときに頭へ入ったんや。

それから、いつも俺は通ると、あの桜の東名阪自動車道の下ぐらいに、知っていますか、四日市の水はおいしいかなんかという標語があるやん。ああ、そうやでこうやって書いてあんねやなというのを、ずっと子供ながらに思っておったでさ。だから、やっぱりその頃にこういうふうなことが頭に入ると、それがずっと50歳を過ぎても残っておるわけやでさ。やっぱり若い頃に、子供においしい四日市市の水というのを教えやなあかん。

俺が教育委員会にも言ったことがあるのが、自分のところの息子が、ペットボトルを持っていくもんで、でも、お父さん、こんなのじゃ足らんわと言うて、水道の水でないしやでうがいすると言って、飲んでおると言うておるでさ。あなたらの代と違うたか分からんけど、何で飲んだらあかんねやと言うたんやさ。そうしたら、時の教育長やで、川村委員みたいに体が丈夫な人やったらええけど、どうのこうのと本当に言うたで。議事録が残っておるで。何やそれ、とかさ、本当やで。四日市の水はまずいのかと言うて、上下水道局を呼んでこいと俺が教育民生常任委員会で言うたんやもん。それやで、まず教育委員会を教育せんとな。

それはどっちもあると思うんや。管理するのが嫌やとか、水道栓を取ってあるというんやもん。出しっ放しになっていることがあるからというところや。今日、自動で止まるセンサーでもやれんのやで。それを上下水道局が教育委員会に言うて、四日市市の水を飲んでもらえるように、学校でもしたほうがええんと違うのか。親も負担やで、中学生はペットボトルでこんなの、どえらい大きいの持っていくんや。全然足らんわさ。だから、もうち

よっと、飲んででもええようにするべきやわ。

知っておるか、教育委員会はそうやって言っておったって。本当に言うたで。川村委員みたいな体やったら少々あたらへんけど、そんな子ばかりやないでと言われて、そんなの本当かどうかを確かめようはないからな。だから、やっぱり四日市の水がおいしいというのと言わんとあかんわ。

ついでに、しゃべりついでで、もうなくなったでええけど、某お店で、四日市の水、富士の何とかと書いた水があった。四日市の水が一番真っ黒になるように書いてあった。何か後で聞いたら、ミネラルか何かで、成分によっては電極で、電気分解すると真っ黒な、すすを飲んでおるような。ああやって、俺の子供が見たときに、うわ、四日市の水は悪いんやと思うておったもん。俺も思ったけど、お店やったと言わんだけ。だから、もうちょっと、知って初めて人間というのは正しいことが分かるでな。知らんとあかんで、やっぱり四日市の水がおいしいというのを知らすための工夫を、経営戦略のほうにやっぱり私は入れるべきやと思うわ。だから、需要が減っていくで縮めようというのも考え方やけど、少しでも使ってもらおうというのももう一つないと、縮むばかりではあかんやろうと思うているの。

それと、やっぱり都市整備部にもっと言って、水を使うような企業を含めた誘致を積極的にやるべきやわ。最近何か、水の豊富なところはよくチョウザメとか何かの魚の養殖のやつをやっておるやん。あんなのは、やっぱりプロジェクトでやるべきだ。投資も考えやんとあかんわ。投資し過ぎたで縮めようではなくて、それやと夢がないでな。潰れる会社やで。投資したんなら、投資に見合う売上げを上げようぐらいのほうが、俺はええと思う。やる気が出るやろう。忙しいでええやといたら、もう事業を辞めやなあかんわと思う。

○ 山本上下水道局事業管理者

川村委員のお言葉の中で、ちょっと気になった点がありましたので。

やはり都市整備部との連携というのは、私ら2人とも出が出ですので思っています。四日市市にとってやっぱり弱いのは、べたっと都市が広がっているというところはやはり弱いと思います。今の基盤を十分に使って、もうちょっと人口密集率を上げたいな、要するに、このところ、庁舎の付近でもマンションの建設が幾つか進んでいますけど、マンションだと受水槽をしていただくもので、急に水が要するというわけではなくて、24時間で必要量を受水しておけばいいもので、今の基盤をそんなに揺るがすことなくいけるものですか

ら、正直、マンションが建っているのはありがたいな、これで何戸増えるとこれぐらい増えるなというようなの見させてもらっています。

だからやはり、少なくとも中部地区というのは、もうちょっと背の高いものが建っても、30万都市としてはいいのではないかと思います。また、十二分なぐらい市街化調整区域も持っていますので、その辺のところは、やはり徐々に使っていけないかなだろうなと思います。

今、四日市市の部分で、企業庁と争っておる部分があります。工業用水を使って、そのまま水道水にろ過膜を使って対応されているところがありますので、その辺がちょっと苦々しいところではあります。一生懸命誘致してきたキオクシアさんは、1、2棟は四日市市の水道水使ってもらっていますが、北側に増設された部分は工業用水を上水化されておられます。大量の工業用水を使っておられますので、それは致し方ないとは思いますが。ですから、やはり庁舎周辺のように、十数階建ての建物が建ち並んで、名古屋からの距離、三重県の中心部としての、まちとしての品格も保つために、やはりもうちょっと背の高いのが建たないかなというのは思いとしてございます。

そして、川村委員のおっしゃっていただいた子供さんへの教育、コロナ禍でなかなか行けなかった、本当にモンドセレクションを取ってから学校に出入りできなかった時間が長いものですから、第7波をやり過ぎたぐらいから、何とか学校さんに出かけて水の授業をしたいなど。幼稚園、保育園のほうは、この6月の水道週間のうちに、職員が出かけて対応はさせていただきました。ただ、公立小学校からは遠慮したいというお話しかなかったもので、また教育委員会にも働きかけて、やはり水がどういうものかというのを含めて、興味を持っていただけるような手法ができるよう、私どもとしても、創意工夫をしながら対応させていただいて、四日市市の水がおいしいんだというのをPRさせていただきたい、そのように思います。

○ 川村幸康委員

年齢時期が大事や、低学年よりも高学年のほうがええ。授業を1限もらいなよ、環境部ももろうておるんやで、水道ももろうたほうがええと思うわ、一つ仕組みで。全四日市市の学校に通う生徒に、1時間だけでええやん、1限。必ず高学年でき、そうすると覚えるで。低学年は忘れてしまうし、意識もそんなにないやろうで、高学年で意識に残るときに一遍きちっと、そういうことが大事やと思う。仕組みづくりが。俺はずーっと言ってお

たけどな。

俺は教育委員会に言っておったんやに。教育長がそうやって言うんやからあかんわな。四日市の水は悪いと思うておるんやで。聞くとな、そのときも言ったで。川村委員、受水槽の中に何かの死骸がようけあるんですよというような言い方までしておったでな、そのときに。もう本当に上下水道局を悪と思うておるぞ、教育委員会は。いや、本当に言うたでね。学校の受水槽は清掃が汚いでというような言い方もしたでさ。そんなのやったら飲ますなよと思ったけど、それもそしたら上下水道局が掃除へ行けさ。そういう考え方やで。それを俺に言うたで、教育民生常任委員会で。何で飲まさんのやと言うたら、受水槽が汚いで、動物の死骸も入っておるとか言ったで。本当かよと思って。ちょっと上下水道局もきちっと言いに行つて、飲んでもらえるようにせなあかんわ。

俺らの頃は小学校へ歯磨きのコップを持っていっておったで。今はそんなのないの、歯磨きの習慣がないのか。今の小学校は昼休みにみんな磨いていないのか。時間がないのか。

歯の健診とか、歯の教育も要るやろう。普通は昼休みに歯を磨かなあかんのやろう。磨いてへんの、知らんか。俺も子供おったけど、覚えていない。

そういうものも含めて、やっぱりやらんとあかんわ。水道を学校でも使ってもらえるようなことを。学校の水需要は大きいやろう、売上げ的にも。だから、もうちょっと教育委員会にも、それは言わなあかんわ。プールもそうか。水泳の授業がなかったから困ったんや、そうしたら。

○ 諸岡 党副委員長

ちょっとだけいいですか。

私にも一緒におったかで全く一緒の記憶があるんですけど、教育委員会の別に弁護するつもりやないけど、そのとき学校が言うておったのは、学校は、屋上に受水タンクがあつて、そこから全部に落としておるで、ふだんの平日、水が流れておるときはええんやけれども、土日明けとか夏休み明けの最初の水はちょっとやばいんですみたいな、そんな言い方しておったで、だから、子供に積極的に飲むようには指導できやんのですみたいな言い方しておつて。

それもそうかなとは思いながらも、やっぱりそこは川村委員の言うように、もう少し物の言い方はあるやろうなというのは正直思います。ぜひよろしくお願いします。

○ 竹野兼主委員

川村委員が言われた、外部からの意見を取り入れるというのは非常に重要なことやなど。また、山本事業管理者のほうも、どういうことができるのかというような答弁されておっただんやけど、そこがそうやって言われるのであれば、PRするのなんかはそういう民間を取り入れることで、より販売量を増やせるという可能性は高いと思うので、そういうことをぜひ考えてもらったらなというふうに、話を聞いていて思ったんですけど、ぜひそれはお願いしたいと思います。

それと、川村委員が言われておった部分のところで、人材が足りやんということで、今、駒田部長が言われておった、1人当たりの設計する人数が、当然要りますやんか。予定しておった事業を進めようと思ったら、人数が足りやんだら当然それは進まないので、今言う10年の予定が遅れてしまったと、それがそういうことなのかなというふうに思うんですけど。

都市整備部のほうで、予算はつけてもそれを設計してやる場所はないというのと同じような意味合いがあるのかなというふうに、川村委員が指摘しておった部分については、そういうふうに感じたことなんやけど。それで合っておるんかどうかだけ、答えだけお願いします。

○ 駒田上下水道局管理部長

今、竹野委員言われたように、予算があっても、やはり人数がおらんというところで、計画量をはけていないというところは現実としてございます。

○ 山本上下水道局事業管理者

設計のほうの部門であるんですけど、都市整備部の事業体と下水道の事業というのは、基本的にコンサルタントがかなり助けてくれる環境があります。ただ、水道に限っていうと、もちろん水管橋やらその辺ぐらいのレベルのものだとコンサルタントさんが十分力を反映してくれるんですけど、まちの中の平面的な場所で水道管の設計をしてくれる業者さんが、正直言っておりません。というのは、水道の文化がやはり地方自治体だけで育ってきたということもあって、そういうコンサルタントがないのも、正直なところ、足を引っ張られておる原因になっています。

もちろん設計自身がちょっとマニアックな要素があって、道路事業やら下水道事業と比

べると、ちょっとなじませにくい。私自身も4年たちましたけど、水道事業はちょっと、いろんな事業をしてきましたもので、一通り何かメニューのように事業はしてきましたけど、水道事業は確かにちょっとやりにくいなど。

だから、専従に近いような職員を育てていかなあかんというところがありますし、去年ぐらいから都市整備部から水道経験者を戻させていただくような格好をさせていただいています。新人を育てていくのもあれですが、昔やっておった人間を引き戻して、もう一回水道事業につき直していただくというようなことをして、端境期をいかに乗り越えていくかというところは、させていただいているところではあります。ただ、この辺はちょっと踏ん張りどころやとは思いますが。

○ 竹野兼主委員

その問題は、先ほどもバディー制度とって、そういう、戻ってきてもらった能力とか経験のある人をうまく使いながら、組織として民間にも委託するということも、それも考えながらという話を聞いていて、きっと大変なんやなというのは思うんですけど、自分たち議会のメンバーとしては、都市・環境常任委員会としては、そのところをやってもらえるのが上下水道局やと思うので、エールというような形で、頑張ってもらいたいということをお話しさせてもらって、終わりたいと思います。

○ 川村幸康委員

PRでいうと、今はやっぱり女子にPRしてもらうのがええでさ。ラグビーのパールズなんか水飲んでもうたらどうなの。あそこは何かよう出ているもんな、近鉄の看板なんかにも。女子ラグビーのパールズな。水を飲むやろうしな。うまいとか言うてもらえればええんや。いや、本当に考えな、ああいうのを。あれも、なかなか四日市市の文化やに、全国規模のトップチームになってきたんやでさ。市長もラグビーをやっておったんやろう。頼んだらええやん、無償やに。四日市の水道水をひねって、おいしいと言うてもらおうようなPRを一遍しなよ。ポスターでも作って。

上下水道局に掲げやなあかんわ、おいしい水のまち四日市の標語か何かのあれは。

○ 駒田上下水道局管理部長

上下水道局の壁面にはあります。

○ 川村幸康委員

見にくいわ、あれ。もうちょっと見えるようにさ、目立つように。

○ 石川善己委員

もうちょっと通り側に出さんと。

○ 川村幸康委員

しっかりとそういうことはせなあかん。今日聞いたんやったら、明日ぐらいにするつもりがないと、経営戦略にならんよ。

以上です。

○ 太田紀子委員長

ほか、よろしいでしょうか。

(なし)

○ 太田紀子委員長

ありがとうございました。ほかにご質疑もございませんので、本件はこの程度といたします。

理事者の方は退席してください。委員の皆様はしばらくお待ちください。お疲れさまでした。

○ 太田紀子委員長

はい。よろしいでしょうか。

まず、行政視察について。

皆さんご存じのような新型コロナの状況を勘案いたしまして、もう今回の行政視察は、正副委員長で協議いたしまして中止とさせていただきます。なお、年間スケジュールの上では、来年令和5年1月23日から25日まで行政視察の候補日となっています。これも、やっぱりするかしないかということは、また協議をこれからしていかないと駄目なのかな

と。状況もありますし。

○ 竹野兼主委員

状況に応じて、今回、この状況でやめるというのは当然、正副委員長の判断は正しいと思うんですけど、もし可能性があるのであれば、残った部分を検討してもらえたらと思います。

○ 太田紀子委員長

来年になって状況がどうなっているかによって、また協議させていただきたいと思いません。

それと、ちょっとまた別件なんですけど、シティ・ミーティングのときに、参加してみえる市民の方から、四日市市の水道—それこそさっきの伊藤委員じゃないけど—大丈夫なのかという話が出て。こういうチラシを持ってみえて、中にチラシが欲しいと言った委員の方が見えたんですよ。その方は、別にそれを自分でしてみえる方じゃないんですけど、責任者の方が私のほうにお持ちいただいたもので、もし見たいという方がございましたらどうぞお持ち帰りくださいという、そういうお話です。

一市民の方が、四日市いのちと水を考える会という会をつくられて、もしかしたら四日市の水が……。

○ 諸岡 覚副委員長

それは、ここで話をすることと違うんじゃないですか。

○ 太田紀子委員長

いやいや、シティ・ミーティングのときに出たことということでお願いいたします。

○ 石川善己委員

状況説明だけ、私がしましょうか。

総合会館で議会報告会とシティ・ミーティングをやったときに、シティ・ミーティングに参加された方が、こういったチラシを持って、四日市の水道が民営化されるというのはこれは困るんだ、どうのこうのと言って、ヨーロッパでもどうのこうのと、要は民営化反

対の方が見えたんです。ただ、それは事実に基づいていない話になるのではというところで、その方が持っていたチラシというのが、このチラシなんです。それをたまたま持ってみえたみたいで、何をベースに四日市の水道が民営化されるという発言をされたのかという、こういうチラシがあったからというところで、もし興味がある方はという話だけなんです。

一部、そういった民間団体のほうで、四日市の水道事業が民営化されるんだということで、うわさが流れていると。それを前提にされた質問だったので、それは事実ではありませんよというところで終わっている話なんです、シティ・ミーティングとしては。

○ 荒木美幸委員

常任委員会のテーマのところにも、同じような内容のものが上がっていますね。意見文書のほうに。

○ 諸岡 党副委員長

そういうデマを流しておるグループがいますね、確かに。

○ 太田紀子委員長

たまたまその方が、このチラシを持ってみえたもので、見たいという方がいましたら。

○ 竹野兼主委員

牽制するためのビラということやね。

○ 川村幸康委員

それはそうと、視察中止の理由というのは幾つかあると思うんですけど、正副委員長判断なのか、向こうがやめてくれと言うたのか。この状況なので、いろいろあるなと思っていて。四日市市議会が断ったのではないやろうけど、向こうから暗黙のうちに断ってくれと言うてきたというのものもあるやにも聞くで、今回はどっちやったんやろうと思って。

○ 諸岡 党副委員長

まず、流れからいうと、前の委員会の際に、何かのときの中止の判断を正副委員長でさせてもらいますということは言っていました。その上で、事務局から聞いたのは、新宿

バスタのほうから、東京は新型コロナウイルス感染症でこんな状態ですよと、本当に大丈夫なんですかという感じで、来んでおいてくれというわけじゃないんですけど、暗に本当にええのという問合せがあったということで、それを聞いた上で、もう私たち正副委員長で、もうこれはやめておきましょうという、そういう流れでした。

○ 川村幸康委員

了解です。

○ 太田紀子委員長

だから、何かあってから行かなければよかったというよりも、先んじて、それこそ本人だけやなく、高齢のご家族を抱えてみえる方とかのことを考えると、行ったほうがいいのかということにはならない。

では、終了いたします。お疲れさまでした。

15 : 04 閉議